

作品名をクリックすると作品に移動します。

【第三十二回「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者一覧】

一、文部科学大臣奨励賞

千葉県 筑波大学附属

聴覚特別支援学校高等部二年

那須映里 灰と化する思考

(体験書籍『華氏451度』レイ・ブラッドベリ著 宇野利泰訳)

二、全国高等学校長協会賞

兵庫県立日高高等学校三年

朝田琴音 母との再会―乙母さんへのメッセージ―

(体験書籍『四十九日のレシピ』伊吹有喜著)

三、全国高等学校長協会賞

香川県立高松高等学校二年

合田 葉 砂の中に生きる

(体験書籍『砂の女』安部公房著)

四、一ツ橋文芸教育振興会賞

福島県立若松商業高等学校三年

岡崎光里 この生命ある限り

(体験書籍『この生命ある限り』大石邦子著)

五、一ツ橋文芸教育振興会賞

石川県立金沢泉丘高等学校一年

諸井佐和 葉桜の頃、そして始まり

(体験書籍『天国からはじまる物語』ガブリエル・ゼヴィン著 堀川志野舞訳)

六、一ツ橋文芸教育振興会賞

岐阜県立大垣北高等学校二年

根笹みのり カラフルな世界の中で。

(体験書籍『カラフル』森絵都著)

七、一ツ橋文芸教育振興会賞

広島県 広島市立美鈴が丘高等学校二年

町田紗由梨 押しつぶされてしまう前に

(体験書籍『車輪の下』ヘルマン・ヘッセ著 高橋健二訳)

八、一ツ橋文芸教育振興会賞

高知県 土佐高等学校一年

吉川 涼 社会の一員として

(体験書籍『戦争を取材する 子どもたちは何を体験したのか』山本美香著)

第三十二回全国高校生読書体験記コンクール

【文部科学大臣奨励賞】

灰と化す思考

筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部 二年

那 須 映 里

七月も終わりに近付いたある日、町の書店が閉店したことに気付いた。いきなりの閉店もそうだが、これで町にある個人経営の書店は全て閉店してしまったという事実にも驚かされた。書店の閉められたシャッターに貼られた閉店の貼り紙を見た時、私の頭に『華氏451度』の世界が浮かびあがった。

本の所有や本を読むことを法律で禁止され、テレビやラジオなどの娯楽に溺れて考えることをしなくなった人々のいる『華氏451度』の世界。今の私たちがいるこの世界と、『華氏451度』の世界の共通点は、人々が本を必要としなくなったことだと思った。今も本がなくてもネットやテレビで満足できる。そういう人が増えると、人々は本を買わなくなり、メディアはそんな風潮を「活字離れ」と報じるが、人々はあまりそれを深刻に考えていないように見える。そして、誰かが用意した情報を無意識に受け入れ、「活字」と共に生きることを当然のように止めてしまうのだろう。『華氏451度』は今から約

六十年前に書かれた本だが、古臭さを感じることはなく、逆に私に現代社会の在様、恐ろしさを感じさせるきっかけとなった。

この本のような現実には、まだ出会っていないが本を読んでいるうちに、はつとさせられるような場面があった。作中では社会にとって本は社会の秩序と平和を損なう有害なものだとされ、本を所有すると、密告を聞きつけた焚書官^{わくしょく}が出勤し、本を燃やすとされている。焚書官でありながらも、本の価値に惹かれつつあるモンターグに、彼の上司であるビーティが話した場面が忘れられない。「古典ものは切りつめて、十五分のラジオ番組にあてはめる。それをさらにカットして、二分もあれば眼がとおせる分量にちぢめ、最後はぎりぎりに短縮して、十行か十二行の辞典用梗概となる」という言葉。「本なんてその程度の価値しかない」と私もビーティに言われたような気分だった。このビーティの言葉は私の心に鉛のように重く沈んだ。なぜならば、ビーティの言葉に出てきたことと似たようなことが現実にも起こっていたからだ。

あるテレビ番組で古典的名作を絵と話によって三分で分かるように解説する、という企画をやっていた。たまたま目に付いたので見たのだが、本当に三分であらすじや読みどころをうまくまとめられていたので驚いたのを覚えている。驚いたと共に、なぜこんなものが放送されるのだろうと思った。本、例え

ば小説などはあらすじを読むだけでは分からないことがたくさん書かれている。登場人物のセリフや地の文に隠された作者の伝えたいことや意図が、読めば読むほど新しい発見として自分に伝わってくる。つまり、本には、その作品の一部分の情報であるあらすじを読んだだけでは分からないことが、目に見えない無数の襞のように隠されているのである。

しかし、あらすじだけを読んでその本について読んだ気になっている人がたくさんいるのだろう。だからテレビ番組に三分で本の内容を解説するような企画が出てくるのだと思った。こうやって人々は本を読んで作者との対話を楽しんだり、作者の伝えたい内容を考えたりする時間を失くしていくのではないだろうか。思考しなくなった人々は、ネットやメディアで書かれていることについて深く考えずにただ受け流してしまうのではないだろうか。この夏、幾つかの大学のオープンキャンパスに参加したが、「メディアに書かれていることを疑い、本当に伝えたいことや裏にあるものを考えろ」という話が印象的だった。何も考えずに受動的に生きるのも楽だろうが、物事の本質について深く考えなくなったら、私達は、やはり「人間」と言えないと思う。

昨今、活字離れが深刻とされているが、私にとっては、それは物事に対して深く考えずに情報を鵜呑みにする人々が増えた証拠なのではないかと思う。近い未来、本を読む時間も惜しく

なり、携帯のアプリなどで簡単にまとめられたダイジェスト版を読んで、その物語について読んだつもりになっている人間がもっと増えていくだろう。そして、世界から本という存在が永久に忘れ去られる日が来るに違いない。

『華氏451度』は摂氏に直すと二三三度になり、その温度に達すると紙は自ら燃えあがるといふ。この世界も華氏四五一度、すなわち人々が本を不要物とし、思考することをやめる温度に達したら、人々の思考する力も紙同様燃えあがり、後に残るのは灰となった本と思考しなくなった人々だけになるのだろうか。私は嫌だ。そんな社会が到来することを何とか防ぎたいが、かなり危険な状況になってきた人々の意識は、たやすく変えられるものではない。しかしこれはこのまま見過ごせる問題ではないだろう。私たちは「人間が思考しなくなること」の恐ろしさを想像し、今、世界がぎりぎりの状態であることをしっかりと受け止めなくてはならないと思う。

体験書籍

『華氏451度』レイ・ブラッドベリ著

宇野利泰訳

第三十二回全国高校生読書体験記コンクール

【全国高等学校長協会賞】

母との再会——乙母^{おっか}さんへのメッセージ——

兵庫県立日高高等学校 三年

朝田 琴音

「あなたの人生は幸せでしたか？」

その言葉を見た瞬間、私は眼を見開かせられた。中学三年の時に亡くなった母のことを考えたからだ。私と父を残し三十九歳で亡くなった母は、どんな思いで逝ったのだろうか。

母の闘病生活は私が中学一年生の時から始まった。抗癌剤で髪の毛が抜け、頻繁に嘔吐し、常に痛みに襲われる。転移と手術を何度も繰り返す。私にはそれがどれほど苦しいことか分からなかった。母はどんなに苦しい状況でも、治療のことを楽しそうに話していたからである。泣いているところは一度も見ることがない。だから、私は母が死ぬことを微塵も予期しなかった。母は元気になって帰ってくる。そう固く信じていたため、容態が急変し、私の希望が叶わなくなったその日からは、ただ悲しみ泣き続けることしかできなかった。

私は母の死を思い出すものを拒むようになった。霊柩車や寺、救急車のサイレン。テレビも病院や臨終の場面になりそうなら

すぐに切ってしまう。さらに、母を思い出す物も遠ざけていた。母を遠ざけ、忘れようとし、それ以外のことは考えなかった。

だからこそ私は大きく揺さぶられた。家族の一人を亡くし、悲しみを越えようとする熱田家の人たちの姿が、私にこのままいいのか問いかけるのだ。彼らは、私と違い、「四十九日のレシビ」をきっかけに乙母さんの人生や残してくれた思いに向き合った。そして、乙母さんと関わった人たちと共に、乙母さんの人生を「年表」にまとめた。それが乙母さんとの絆とその思いを確かめることに繋がり、悲しみを越えた新しい人生へと進めた。

私は気づかされた。亡くなった人の思いを知る。その思いと共に生きる。そうでなければ、その人が、母が生きていたことに意味がない。乙母さんの元同僚が伝える「誰かのテイクオフ・ボードになれたら、忘れられても良い」という言葉。相手が愛してくれていなくても、自分がその人を愛していたらそれで幸せ。この無償の愛と呼べるほどの思いを感じ取ったからこそ、熱田家の人たちは前へと飛び発ったのだ。

乙母さんの思いは尊い。だが、それを知ることができたのは熱田家の人たちが向き合う悲しみに耐え、乙母さんの人生に真正面から向き合ったからだ。ならば、私も今まで目を背けてきた母にきちんと向き合いたい。母の思いを感じたい。私はその思いに動かされた。

私は父に母のことを聞いてみた。父は、そう聞いてくれることを何年も待っていたように答えてくれた。

「あいつはいつも笑顔を絶やさず、常に家族のことを考えていた。健康なときも、病気になったときもだ。入院したら子供に会えないと悲しんでいてね。いつか伝えて欲しいと、自分の伝えられないかもしれない思いをこれに書いていたんだ。」

そう言って、父は母の日記帳を渡してくれた。病室で最期まで書き続けた日記帳を。

私は、受け取った日記帳の重みを感じながらページをめくっていた。

最初のページは料理のレシピだった。肉じゃが、金目鯛の煮付け、大豆ハンバーグ。美味しくて、私が大好きだった料理の数々。何度も書き足され、直した跡。欄外には「もつと美味しく作って、家族を喜ばせてあげたい。」と書いてある。こんな努力が、母の料理を美味しいものにしていたのか。

私についても書いてある。「入学式に行けなくてごめんね。もう中学生。部活に入って、勉強も頑張っているからね。」そのあとに、入学祝いの言葉が書かれていた。その字もその言葉も、優しかった母を思い出させてくれる。日記帳を見ていると母の優しさが胸に染み込んできた。

私は、本当に母のことが大好きだった。母にずっと生きていてほしかった。読み進める内に忘れていた気持ちを思いだし、

涙ぐんでいた。

母が最後に書いただろうページには一言だけ書いてあった。「家族みんながずっと、健康で、幸せに暮らしていけますように」と。

私は、もう涙を止められなかった。母の思いを確かに感じる。母は最期まで私を愛し、私の幸福を願ってくれていた。確かに感じる母の愛は私の全身を満たしていくようだ。

母は死んでしまった。だが母の愛は私の胸に残っている。今生きている私は、母が愛してくれた私だ。いつも元気で、幸せに暮らせるように、私はそうした母の愛によって育ってきた。母の願いを私は知らずに受け取っていたのだ。

乙母さん、あなたは幸せだったのではないでしょう。私の母も、きっと、幸せでした。あなたと同じように、家族を愛し、家族から愛されていたのですから。

私は、そう呟いていた。

体験書籍

『四十九日のレシピ』伊吹有喜著

第三十二回全国高校生読書体験記コンクール

【全国高等学校長協会賞】

砂の中に生きる

香川県立高松高等学校 二年

合 田

葉

あれは小学校の頃だっただろうか。家族で鳥取砂丘を旅行したことがあった。どこまでも続く砂の丘のゆるやかな曲線、風向きによって自由自在に表情を変える風紋。自然の作り出した砂の芸術に、ただただ圧倒されたことを今でも覚えている。丘の向こうにある海が見たくて、必死で歩くのに、足は砂にめり込み、靴の中は砂だらけになり、前に進めない。風が吹く度に砂が舞い上がり、それが目に入って涙がこぼれる。美しい景色の中に人を拒み、よせつけようとしない自然の脅威を感じた。『砂の女』は、砂丘へ昆虫採集に出かけた男が、村人達の策略により、砂穴の底に埋もれていく一軒家に閉じこめられ、その家に住む女と家を守るため砂掻きをすることを強いられるという話である。地上に風や流れがある以上、砂地の形成は避けがたいものとなる。風が吹き、川が流れ、海が波うつっているかぎり、砂は次々と土壌の中から生み出され、まるで生き物のように這ってまわる。家が砂に埋もれないよう、毎日砂を掻く。掻

いても掻いても砂は降りつもる。どこまでも砂は二人を追いつめる。読んでいくうちに、必死にもがく二人の苦しみや恐怖が痛い程私に伝わってきた。そしていつの間にか、私には二人の姿がどこか自分と重なって見える気がした。私とは全く異なる二人なのになぜだろう。

夏休み、空は青く、灼熱の太陽がふりそそぐ。でも私はどうだろう。空を見上げる事も忘れていた。部活、宿題、勉強、塾、繰り返し。いつも何かに追われている。何かに追われながらもいつも走っている。走っていないと不安になる。夏休みだけじゃない。高校に入学してずっとかもしれない。苦しみあえぐ毎日、何もかもから逃げ出して自由になれたらどんなに楽だろうと思う。でもそこから動く事ができない。私は、彼ら二人と同じように、定着に固執している。

男は言う。「定着に固執しようとするからこそ、あのいとわしい競争もはじまるのではなからうか？ もし定着をやめて、砂の流動に身をまかせてしまえば、もはや競争もありえないはずである。現に、沙漠にも花が咲き、虫やけものが住んでいる。強い適応能力を利用して、競争圏外にのがれた生き物たちだ」と。

はたしてそうなのであろうか。何もかもから逃げ出したら私は楽になれるのか。定着から逃れ、競争から逃れ、たとえ楽になったとして、その生活から生きる喜びや感動を得ることがで

きるのであるか。

男は砂穴から脱出しようと、あらゆる方法を考え実行する。何度も失敗するが、とうとう砂穴から抜け出すことに成功した。そして村から必死で逃げ出そうとするが、砂丘の砂にはばまれる。足をとられ、まるで蟻地獄にかかった蟻だ。砂丘を知りつくし、日々砂と戦う村の人たちに、砂丘の中かなうはずがなかった。男は再びとらえられ、砂穴に閉じ込められた。でも男は絶望しなかった。それは、再び穴の中で生活する中で、偶然にも溜水装置を作り出すことに成功したからである。水に飢える生活の中、砂搔きに追われながらもその合間をぬって、何よりも必要な水を確保することのできる溜水装置の研究に男は没頭した。男はもう逃げなかった。それは逃げることをあきらめたのではなく、自らの意志で砂穴の生活を選んだからである。彼は生きがいを見つけた。あんなに嫌がっていた穴の中の生活が、彼にとって意味あるものと変わったのだ。そしてそのことが私に、とても大切なことを気づかせてくれた。

宿題に追われ、勉強に追われ、塾に追われ、部活に追われ、走り続ける私の生活は、ある意味この男の生活と同じだ。しかしそんな毎日を、不毛なものにするか、それとも意味ある高校生活に変えるか、それは私次第なのだ。大切な事は、自分の置かれた状況の中で、いかに没頭できるものを見出し、それを楽しみ、自分の存在価値を確かめるべく努力するかということ

なのだ。私は砂穴から脱出することばかり考えていた男と同じように、いろんな事から逃げていたように思う。逃げて何もう変わらな。定着することに固執し、日々あえぎ苦しむからこそ、ふと見上げた空の青さに感動することができるのだ。そして、ただ定着するのではなく、すべてひきうけ、あえて立ち向かって行ける自分でありたい。そうすれば、状況は同じでも、何かが変わるはずである。

世界は砂のようなものだ、と男は言う。私は小学校の頃に見た砂丘を思い出す。自然によって作られた美しく、やさしく力強い砂の芸術、砂の流動は、常に自由で気ままだ。だが一歩足を踏み入れたら、恐ろしく厳しく私たちにいどみかかる。私は砂に足をとられ、砂が目に入り、前に進めなくなる。自由が奪われ動けなくなったとしても、ここにとどまり一歩ずつ歩みを進めよう。砂の丘を越えれば、必ず広い海が見えるはずだから。

体験書籍

『砂の女』安部公房著

第三十二回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

この生命ある限り

福島県立若松商業高等学校 三年

岡崎 光里

人の運命とは無情だ。大切なものを容赦なく奪っていく。しかし過酷な運命を克服した時、人は再生する。人には運命を変える強さ、運命を使命にする強さがあることを知った。

本書は著者大石邦子さんが、事故による不治の病で麻痺に襲われた苦悩の日々を綴った手記である。邦子は当時二十二歳、働くことに大きな喜びを感じながら、家族に囲まれ、故郷で幸せに暮らしていた。ある朝、通勤バスに乗った彼女は、トラックとの衝突を避けようとした急ブレーキによって、乗客の下敷きになり意識を失う。病院で目覚めた時、左半身の感覚はなくなっていた。起き上がれない。歩けない。出来ることは何一つなくなっていた。どうしてこんな目に遭うのか。数時間前、確かに歩いて家を出た。なのに今ここにいるのは別の自分。排泄の感覚まで失われていた。彼女を絶望が打ちのめした。

彼女の嘆きと絶望が、痛いほど伝わってきて涙が流れた。毎日を精一杯善良に生きていただけなのに。それらは、ある日突

然私たちが家族を襲ってきた絶望と重なった。私は七年前、中学三年生だった姉を交通事故で失った。私たち家族の平穏は突然壊れた。大好きな姉の理不尽な死。なぜ優しい努力家の姉の命が奪われるのか。十歳の私は涙と怒りの中で、この世には自分の努力ではどうにもならないことがあることを知った。不条理。これが運命なのか。事故後、皆が私に「頑張って」と言った。私は涙を堪え思った。頑張っている。これ以上どう頑張れと言うのか。私の気持ちなど誰にも分からない。虚しさ、社会の矛盾。私は生きる意味を見出せなくなった。屈託ない同級生たちとの距離は広がっていった。

何度検査をしても邦子の麻痺の原因は解明されず、治療法もなく、全く動けない体に回復の希望はなかった。家族の愛情や友人たちの優しさを感じていた彼女だが、ある夜大量の睡眠薬を飲み、自殺を図る。昏睡状態から覚め命が助かった彼女は、両親を哀しませてしまったことを心から後悔する。本当は生きたいのだ。希望を持って精一杯生きたいのだ。

邦子は隣の患者の見舞いに来た慶という一人の男性と出会う。辛い入院生活を彼は優しく励まし見守る。彼がいたからリハビリにも必死に励み、補装具を着ければ立つことが出来るまじになった。しかし運命は残酷だ。麻痺は右足にまで広がり、また振出しに戻った。

今年、私は会津大学で行われている視覚障害者の人たちのパ

ソコン勉強会に、ボランティアとして参加した。私は母の知り合いの全盲の方と親しくしていて、勉強会には以前から関心があった。その会は衝撃的だった。私の先入観はすぐに吹き飛んだ。皆さんが心から楽しそうなのだ。音声ソフトを使い、キーボードでメールを打ち、インターネットで情報を得る。一人の男性はマラソンが趣味で、私と一緒に走らないかと声をかけてくれた。目が見えないことで、計り知れない苦労と困難があったはずだ。しかし、目の前の彼らは何事も無かったように明るい。冗談を言い、あちこちで笑い声が響く。私はその光景を見ているうちに、頑なになっていた心が柔らかになるのを感じた。誰も私の事情を知らない。けれど、私は励ましをもらったような気がした。彼らの笑顔には、運命を克服してきた人にかない穏やかさがあつた。何十年もかけて、彼らは辛く険しい困難を一つ一つ自分の努力で解決してきた。まさに真の強さだ。私は大石さんの講演を小学三年生の時に聴いていた。姉も一緒だった。大石さんの壮絶な体験談は、幼い私の心にも響いた。姉も真剣に聴いていた。その二年後、姉は十四歳でこの世を去った。その後、母と出席したある式で、私は大石さんとお話する機会を得た。大石さんは別れ際に「頑張っつね」と笑顔で言ってくれた。私は素直に頷くことができた。私は今回改めて大石さんの強さを感じた。大石さんは次々襲う過酷な状況を乗り越え、長い闘病生活を経て、エッセイストとして活躍するよ

うになる。車椅子で講演を行い、悩みを抱える多くの人に希望を与えている。大石さんはそれを自分の使命だと言う。運命を使命だと言える強さ。私もその強さを持ちたい。

邦子は発病から三年後、第四領域症候群と診断される。現代の医学では完治することはない。唯一排泄の感覚だけは訓練により取り戻していた。彼女は心の支えだった慶に、大切な人だから誰よりも幸せになってほしいと、別れを告げる。二人の互いを想い合う優しさが胸に迫り、彼女の決意が切なかった。そして、残された動く右手だけで強く生きていこうと誓う。

逆らうことのできない運命によって、人生が大きく変わってしまった人たち。嘆きや怒りは尽きない。しかし、人生はいつからでも再び歩み出せる。生きてさえいれば、何度でもやり直せる。そして希望を見出せる。人は力強く再生する。私にも生かされている意味、使命があるはずだ。私も自らの手で新しい運命を切り開き、強く生きていきたいと思う。

体験書籍

『この生命ある限り』大石邦子著

第三十二回全国高校生読書体験記コンクール

「一ツ橋文芸教育振興会賞」

葉桜の頃、そして始まり

石川県立金沢泉丘高等学校 一年

諸井 佐和

今年の春、友人が四トントラックに轢かれて亡くなった。その折、トラックのすぐ後ろに中学の時の先生がいて、すぐに人工呼吸を行った。そのため、二度と目を覚ますことはなかったものの、その後の五日間、彼女は頑張って生き続けることが出来た。

彼女は努力家で、懸命に勉強して、行きたかった高校に見事合格したところだった。まだ二ヶ月しか経ってはいなかった。まだ葉桜の季節だった。

彼女の葬儀で、彼女の父は、最後にこう挨拶した。「あの子の分まで遊んで下さい。あの子の分まで勉強して下さい。あの子の分まで笑って下さい。そしてあの子の分まで幸せになして下さい。」

私は涙が止まらなかった。

この本の主人公、十五歳のリズも、交通事故に遭い、死んで「ある場所」に辿り着く。そしてもう一つの人生を与えられる。

その場所は私達の生きている世界とほとんど変わらないのだが、ただ一つ大きく違うところがある。それは、そこでは年を重ねるのではなく、若返ってゆくということだ。

けれども、そんな新しい人生を受け入れることが出来なかったリズは、「わたしの人生は地上にあった。ここにはわたしの人生なんてない」と反発する。彼女はひどく落ち込み、身なりも構わず、生きている人の世界を覗き見ることが出来る「見晴らし台」に入り浸り、家族や友人の様子を見ることが出来る生き甲斐とする。もはや肉体的な成長の許されない世界で、精神的にも後ろ向きになり、過去の世界を懐かしんでばかりいる。

だが、この新しい世界で色々な人との出会いに恵まれ、心の通う家族や仲間に見守られながら、死ぬ前の頃にもましてリズは生き生きとした人生を生きるようになる。

そしてある日リズは理解する。「死」は結局、折り返し地点に過ぎず、人生は連綿と続いてゆくのだと。

これは、謂わば一人の少女の前向きな逆戻りの人生を描いた物語だ。物語の中で、死んだ者が次第に若返ってゆくのは、肉体的成長のない世界で、精神的後退を続け、過去ばかりを懐古する生き方の、暗喩に他なるまい。

私は小学生の頃から、トランポリンを続けている。最初の頃は私も、リズが「見晴らし台」に籠もって家族や友人の生活を

眺め続けていたように、私より遙かに上手な選手の演技をうらやましく眺めていた気がする。

ただ、トランポリンには不思議な瞬間がある。空中に浮かび、何度も身体が回転するある刹那に、私と私を取り巻く世界とが渾然となる時があるのだ。決してそれほど素晴らしい選手ではない私が、これまでこの競技を続けてこれたのも、この不思議な瞬間を味わってしまったせいかもしれない。

亡くなった友人は、今どこに在るのだろうか。もう、「ある場所」に辿り着いたのだろうか。私達のことを「見晴らし台」から見ているだろうか。仲間は出来たのだろうか。両親よりも早く死んでしまった自分のことを責め続けてはいないだろうか。

もしもそうならば、私はこう伝えたい。「貴方が今いる場所も、そんなに悪いところじゃないよ。きっと幸せになれるよ」と。

人は生きている間に、どれ位後悔をするのだろうか。後悔しないためには、どうしたらよいのだろうか。私もこれまで十五年間、たくさん後悔をした。そしてこれからも後悔をしながら、生きてゆくのだらうと思う。人には、いつ何が起こるか分からない。明日には病気になるかもしれないし、怪我をするかもしれない。明日やらうと思っていたことが出来なくなるかもしれないのだ。

この本を読んで、一つ分かったことがある。それは、死の側

から照らせば生は輝くということである。友人が亡くなった時には、悲しみはあまりに生々しすぎて、まだ私はそのことに気がつきはしなかった。けれど今年の夏この本は、私にこのことを気づかせてくれた。そしてそれらの体験によって、私が続けているトランポリンという競技が持つ意味も、以前よりは詳らかになった気がする。友人の父が最後に仰った、「そしてあの子の分まで幸せになって下さい」という言葉の意味も。

そう言えば、彼女が亡くなった頃に見た葉桜の間からは、きらきら陽の光が射していた。

今年は桜の満開が遅かった。だから私達が新しい学校に入学した時には、まだ桜は咲いていなかった。だから、少しだけ高校にも馴れ始めた頃に見た花は、本当に綺麗だった。

友人は、その桜の木が葉桜になる頃迄しか、あの憧れの高校生活を過ごすことは出来なかったが、彼女もあの燦めく陽の光を眩しいと感じたのだろうか。吹き抜ける風の葉のざわめきを聴いたのだろうか。今もトランポリンで宙返りをする瞬間、ほんのりと漂う桜の葉の香りを嗅いだような気分になる時がある。今確かに、私は幸せの最中にいるのかもしれない。

体験書籍

『天国からはじまる物語』ガブリエル・ゼヴィン著

堀川志野舞訳

第三十二回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

カラフルな世界の中で。

岐阜県立大垣北高等学校二年

根笹　みのり

「あなたはあの世界にいなければならぬ」

反抗期。周囲の人やものをやたらと傷つける時期。しかしそれ以上に、そんな自分に傷つく時期。

反抗期だった頃の私は、まず自分を取り巻く「世界」が嫌いだった。逃げ出したいのに逃げ出せない、私の周りの「世界」は私を苦しめた。そして私は、自分自身も大嫌いだった。だから「私はなぜ生きているのだろう。」と自問しては、生きることがつらくなっていた。

だがそんな時、ある小説の一文が私を救ってくれた。その一文こそ、冒頭の引用文である。

小説の題名は、『カラフル』。

主人公は服薬自殺を図った少年、真。彼はいじめに遭ってから人間関係が上手くいけなくなり、自分の世界に閉じ籠もるようになってしまった。

生きることよりも死ぬことを考えるほうがずっと楽だったし、

生よりも死のほうが魅力的に思えた。

いつしかこう考えるようになった真は、自分の命を絶とうとする。が失敗し、サポート役となる天使のプラプラと共に、生きていくことに「再挑戦」することとなる。

私は真と自分を重ねるようにして読み進めていった。そして真とプラプラは、私に二つの大切な事を伝えてくれた。

一つ目は「見方を変えれば『世界』も変わる。」ということだ。再挑戦をする前の真は、友達が一人もいなかった。なぜならいじめにより人を恐れるようになっていたからだ。しかし真は再挑戦で、人に対する「怖い」という見方を、少しずつ変えていった。すると彼に一人の友達ができた。真が見方を変えてみたことで彼の周りの「世界」は明らかに表情を変えたのだった。

私はこの時、「私の嫌いなこの『世界』も見方を変えれば、私の好きな『世界』へ変えられるのではないか」と思った。私には「世界」＝「苦」という固定観念のようなものがあつた。それがあつた限り、私の「世界」の良い所など、見えてくるはずがない。

たった一色だと思っていたものがよく見るとじつにいろんな色を秘めていた

まさにその通りだと思う。私は「世界」の全てを苦しみだと思っていたがよく見れば、喜びも怒りも哀しみも楽しさも、

「世界」は様々な要素を含んでいた。少しだけ前向きに見ることと私の「世界」の表情も変えることができた。

二つ目は「人は誰かに求められているから生きる」ということだ。真は再挑戦を通して、家族は真が生きていることをとても喜んでいうことに気がついた。そして同時に自殺を図ったことを後悔した。

私は「なぜ生きなくてはいけないのか。」ということを考えて生きていた。私の人生、「生の終止符」はいつでも打つことができるのに。その答えは、真とプラプラが教えてくれた。自分の事を大切に思ってくれている人がいる。愛してくれる人がいる。見守ってくれる人がいる。それは例えば親であつたり友人であつたりする。どんなに自分の事が嫌いでもそんな自分を求めてくれる人がいるなら、生きていこうと思う。生きる理由は簡単などころにあつた。

反抗期だつた頃の私が嫌いだつたもの。「世界」と「自分」。しかし『カラフル』を読んで私の考え方は変わった。まず私の「世界」を少し愛せるようになった。なぜなら「世界」は必ずしも真っ暗闇で黒色だけではないと分かつたからだ。確かにぱつと見ると、黒色のように見えるかもしれない。だが、目をこらせばそこには様々な色が混ざっているのだということに気がつく。私達の生きるそれぞれの「世界」はどれも「カラフル」である。だからそんな「カラフルな世界」を楽しんで生きたい

と思つた。そして私は「自分」のことも、大嫌いではなくなつた。今も自分自身に憤りを感じることはある。しかし、誰かから愛される自分を自分で否定するのではなく、自分の良さも悪さも含めて全てを認めていこうと思う。

「世界」を愛せる。「自分」を愛せる。「生きることの苦しみ」に立ち向かう準備が出来たとき、私はプラプラが真に贈つた、ある言葉を思い出していた。

あなたはあの世界にいない必要ではない。この言葉は再挑戦に成功して、プラプラのサポートが必要ではなくなった真と、プラプラの別れの場面のプラプラの言葉である。真に、真の「世界」の中で力強く生きてほしいという願いが込められているように思う。

『カラフル』の本文内に二人の別れの後の話は何も書かれていない。だが真ならばきつと精一杯に生きているだろう。

わたしはこの世界にいない必要はない。
カラフルな世界の中で私も懸命に生きよう。

体験書籍

『カラフル』 森絵都著

第三十二回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

押しつぶされてしまう前に

広島市立美鈴が丘高等学校二年

町田 紗由梨

ひとりでがんばっている人ほど、たえている人ほど、「辛い」とは口にしない。だから、そんな人に気づくのはとても難しいことだ。少し冷静になって周囲を見れば、すぐに分かる違いがあるのに誰も察知することができない。気づいてほしい、と当人が思っているにもかかわらず、誰かが気づいていなければいけないのだと私は思う。何故なら、遅かれ早かれいつかは、我慢していたものが重く高く積み重なって、つぶされてしまうから。

私が『車輪の下』という本を手にしたのは中学校生活も終わりをむかえようとしていた時だった。姉が気になって買って来たというこの本を、私は結構な時間をかけて読み進めていった。その時期は高校受験をひかえていたため、じっくり読み込んだというより、学校の休憩時間の合い間等に軽い気持ちで読み流した、という方が近い。私も姉も忙しかったから、その本の内容について取り立てて意見を交換した記憶はない。あの

時、読み終わって第一に思ったことは、「この本の主人公みたいに、周囲の期待にこたえようとしてここまで不幸になる人なんているのか。」ということだった。その頃の私といえば、「人並みよりはがんばっている方だ」と自分で思ってた満足していたのだから、主人公・ハンス少年の「人とは違った悩み」など到底想像の追いつくものではなかった。それに、時期が時期であったから、ハンス少年が勉強や教師の重圧によって崩れていく様子を描いたこの本が、私にはとても縁起の悪いものに思えたのだ。しかも、ハンスは苦悩して入った学校を結局去ってしまった、見習い工として再起するも、物語の最後では川に溺れて――あるいは自ら飛び込んで――亡くなってしまうのである。救いがない、そう感じた。だから私は、この本を減多に使わない本棚にしまった。きっともう、読むつもりはなかったのだ。しかし、受験が終わり、私に再びこの本を読む機会がめぐってきたのだった。

学校の先生は、受験をがんばったのはもちろん私たち自身だが、周りの人の応援あつてのことだとおっしゃった。そうだなあ、としみじみ思った。特に母は、勉強しなさいと強要したりせず、ひたすら私をはげまし、そして信じてくれていた。私は勉強があまり好きではないから、そんな母の優しさで程良く力まずに受験にのぞめたのだと思う。ハンス少年の父親や学校の教師も、思えば彼に無理に勉強を強いた描写はなかった。私は

本棚を整理していた時、そのことが引つかかっていたこともあり、再びこの本を読むことになったのだ。

二度目に読み終えたとき、私の感じていた主人公とその周囲との関係の違和感の正体が分かった気がした。それは、生ぬるく、生かさず殺さず、そんな雰囲気。ハンスは、周囲のアドバースに「はい」しか言わないのだ。強制されていない勉強、けれど得意であった故に期待され、それに反発せず「はい」と答える。内側にどんなこともってゆくハンスの気持ち、そこには描かれていた。考えすぎだろう、などと思っていた自分はずかしくなった。ハンスはとてもひたむきな少年だったのだ。

私が真つ先に、この物語と重ねて見てしまった人物は、自分ではなく母であった。母は、よく人の世話を焼く。それは、世話好きだからというわけではないように思う。ある種の義務のようなもので、自分の予定を考えるより先に人のために出かけていたりする。その「くせ」を植えてしまったのは、きっと私たち家族なのだ。兄弟が多く、年齢の幅もある私たちを育てる内にそうなってしまったのだろう。母が動くのが当然、と無意識に考えて、頭痛がするのに昼間出かけていたりするのを完全に母の意志だと思っていた。母ひとりで用事を済ませに行つて、不満を言わず、むしろ「もつとがんばればよかった。」と言うことに、私はこの本と同じ違和感をもっていたのに気がついた。母は、「何も言われない強制」に従つて人のた

めにと動いていたのだ。

母にその事を伝えて、「お母さんががんばってるのは誰でも知ってるよ。でも、我慢してまで人の事をしてあげなくてもいい。それは義務じゃないよ。」と何度か声をかけた。最初はそれでもがんばってしまうのではと心配していたが、最近はお自分の体調のことも考えて、人に過剰な気配りをするのも減ったように思う。うれしかった。

誰かが辛い、と思い、それを押し殺してしまうことがあるなら、私は周囲の人がそれに気づかなければならないと学んだ。ハンス少年の悲しい一生は、私に母への助言という恩返しができる機会を与えてくれた。もうこの本をしまい込むことはないだろう。

体験書籍

『車輪の下』ヘルマン・ヘッセ著

高橋健二訳

第三十二回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

社会の一員として

高知県 土佐高等学校 一年

吉川

涼

八月も下旬に差ししかかったある日、ふと眺めていたニュース番組で気になる報道がされていた。シリアの内戦で取材していた日本人記者が現地で死亡したと言うのだ。その戦場ジャーナリストの名前は山本美香。調べてみると、長年戦場に赴いては現地の真実を報道し続けてきた女性だった。著書も何冊か出版している。若くして亡くなった彼女が、その人生の中で何を伝えようとしていたのか。その一端でも知りたいと思い、この『戦争取材する』という本を購入したのだった。

作中、筆者は何度も反戦のメッセージを強調している。そして、これからの時代を担う僕達に対して、平和維持の努力を失くさないようにと投げかけているのだ。言うまでもなくこれこそが筆者の最も伝えたい主題なのだろう。

しかし、そんな山本美香という人物に対して、ひいては戦場カメラマンという職業に対して懐疑的に考える人達が存在する。新聞や週刊誌の記事、あるいはインターネット上の討論な

どでも、彼女の死を自業自得とする意見が存在するのだ。勝手に戦場へ行つて死んだ愚かな人間だとか、戦場で笑顔を見せるなんて不謹慎だとか、そもそも戦場の報道することに何の意味があるのかと言うのだ。

そうした意見も、ある意味では正論かもしれない。しかし、別の側面から考えれば、彼女が大きな志を持つてこの仕事に臨んでいたことが分かる。

彼女は、戦闘に巻き込まれた人々の日常を知らせたかった。戦場・紛争地帯という異常な空間で、それでもそこで生きている人々が居るということを伝えたかったのだ。地雷で脚を失った少年、少年兵にされた子供達、戦争のトラウマや難民。平和な日本にいるだけでは決して見えてこない真実だ。知らなければスルーできる、知ったところで僕達は無力な問題かもしれない。けれど、それでも彼女は知らないことは罪だとすら思い、作中で触れているように、「彼らの存在を世界に伝えることで、どうしたら救うことができるか、考えるきっかけをつくっていく」のがジャーナリストの役目だと信じていたのだ。

僕は、これはとても大きな覚悟であり志であると思う。自分の命を賭けて赤の他人のために動ける人間がどれほど居るだろう。結果的に彼女は殉職したわけだが、その生き様に後悔はなかったはずだ。

グローバル化の進む近年、島国日本と云えど、国際情勢につ

いて知らぬ存ぜぬでは済まないだろう。世界に目を向ける必要があるのだ。山本美香という人物の想いに触れ、僕にも少なからずそんな気持ちが芽生えた。どうすれば世界に貢献できるのか。国際社会で生きるとはどういうことなのか。しかし今の僕にはわからないことばかりなのだ。

幸い僕は英語が好きで、言語という壁は越えられると思う。しかし重要なのはその先、自分が何をするか・何を求められるのかということだ。

考えてみると、実に多くの職業で、その気になれば国際社会に貢献することはできる。医者や研究者然り、または小説家や音楽家然りだ。だが、僕が思うに「国際社会で生きる」ことは、そんな単純な職業観ではない。

言わばそれは、「街中で困っている外国人を見かけて声をかける」というようなことに通じている気がする。抽象的だがそんな優しさに近いのだ。そしてここでも、筆者は一つの見解を示してくれた。

イラク戦争における、イラクとアメリカ双方の視点。イラク側では、宗派の違いによって待遇や価値観が異なってしまう現実が。アメリカ側では、独裁者から救ったはずのイラク市民から攻撃されるという現実が。悲しいことだが、それぞれに正義があつて思いが食い違ってしまうために、テロが起きたのだ。

確かに人間には、宗教や価値観、経済力や生まれの違いが時

に大きな障害として立ちはだかる。今も多くの地域で紛争や内戦が続いている。個人の力ではどうしようもないことだ。ならば諦めるのか？ いや、そうではないと彼女は伝えたいはずだ。

僕がこの本から学んだ、国際社会で生きるとは何か？という問いへの答え。それは、「相手を受け入れる」ということだ。優しさや思いやりや愛情を持つて接すること。小学校でも教えられる簡単なことだが、それを実行している人間は案外少ないように思う。個人の力は微々たるものでも、世界中の人が相手を受け入れようと努力すれば、少なくとも短絡的な争いは無くなるはずだ。少しずつ、しかし確実に世界は平和へと向かうだろう。無論簡単ではないが、いつかは「その日」が訪れると信じたい。きっと山本美香さんも「その日」を信じていたのだろうから。

僕はまだ将来のことはわからず何も定まっていはいない。しかし「受け入れる」姿勢を忘れずに、世界に対して真剣に生きていこう。

体験書籍

『戦争を取材する 子どもたちは何を体験したのか』

山本美香著

選考委員による選評

灰や砂と化すことのない思考

辻原 登

読書体験記コンクールに最も適しいエッセイが最優秀賞に選ばれた。

レイ・ブラッドベリは去年亡くなったが、彼の代表作の一つ、『華氏451度』のあらすじは多くの人々が知っている。また、F・トリュフォーによって映画化され、世界中の人々がみて、魅了された。しかし、あらすじを知っただけで、映画をみただけで、この作品のエッセンス（本質）がほんとうに伝わっているだろうか……。

那須映里さんの「灰と化す思考」はそのところに切り込んでいる。その思考は高校生とは思えない。電動式掘削機のように鋭く、力強く仮借ない。どこで身につけたのだろう。もちろん、読書によってだ。

那須さんは、読書についてこう書く。

……つまり、本には、その作品の一部分の情報であるあらすじ（傍点辻原）を読んだだけでは分からないことが、目に見えない無数の襞のように隠されているのである。

あらすじとは、その作品の一部分の情報にすぎない、と那須さんは看破した。エッセンスはあらすじにはない、と言っている。時間をかけた読書行為の中からしか本のエッセンスは現われない、と。ここに那須さんの高度な批評精神をみて、感心した。この批評精神のあるかぎり、思考は決して灰と化すことはないだろう。

合田栞さんの「砂の中に生きる」は、安部公房の『砂の女』の基調にある不条理を、ナイーブに受け止め、この作品から現実に生きてゆく知恵を与えられるという方向の読みかたを実践した。砂穴の中の生活を、合田さんは、宿題に追われ、勉強に追われ、塾に、部活に追われて走り続ける自分の生活になぞらえるのだ。そして、次のような希望にみちた文章でしめくくった。

……私は砂に足を取られ……、自由が奪われ動けなくなったとしても、ここにとどまり一歩ずつ歩みを進めよう。砂の丘を越えれば、必ず広い海が見えるはずだから。

ここにも、先的那須さん同様、決して灰と化さない、砂と化さない強靱かつ柔軟な思考が認められる。朝田琴音さんの「母との再会―乙母さんへのメッセージ―」は、『四十九日のレシビ』（伊吹有喜）から、「亡くなった人の思いを知る。その思いと共に生きる」というエッセンスを取り出し、「お母さんの死」という過酷な体験を昇華してゆく過程が丁寧に辿られる。読書が培う力は、現実生活から与えられる経験を凌駕する。だが、それはあらず、理解からは得られない。三つの作品はそのことを証明した。

岡崎光里さんの「この生命ある限り」、諸井佐和さんの「葉桜の頃、そして始まり」、根笹みのりさんの「カラフルな世界の中で」、町田紗由梨さん「押しつぶされてしまう前に」、吉川涼さん「社会の一員として」。これらの作品はすべて、先に挙げた三作品に述べたことの、それぞれの個性と魅力にみちた実践である。顕彰に値する。

強さの魅力、危うさの魅力

穂村 弘

「灰と化す思考」では、「本の所有や本を読むことを法律で禁止され、テレビやラジオなどの娯楽に溺れて考えることをしなくなった人々のいる『華氏451度』の世界」と、「活字離れ」が深刻とされる我々の現実世界とが比較されている。強制ではなく自ら進んで本を手放す現実の方が或る意味では危機的とも云えるわけだが、このような状況を捉えた文章は鋭い。「この世界も華氏四五一度、すなわち人々が本を不要物とし、思考することをやめる温度に達したら、人々の思考する力も紙同様燃えあがり、後に残るのは灰となった本と思考しなくなった人々だけになるのだろうか。私は嫌だ」などの記述には、「本」を「思考」のメタファーとして展開してゆく言葉の力を感じる。リズムミカルな強さのある文体に加えて、全体を象徴する「灰と化す思考」というタイトルも魅力的だ。

読書体験記コンクールの応募作には、そのネーミングのせいか、本の内容と自らの実体験を重ねる文章が多いのだが、その中で特に良かったのは「母との再会―乙母さんへのメッセージ―」である。個人的な経験から、「だからこそ私は大きく揺さぶられた」

云えるのだが、その危うさに惹かれた。

という読書の衝撃を経て、「私は気づかされた」に至る流れに引き込まれた。ここには、読書体験記という枠組みが自然に引き寄せてしまいがちな「気づき」のための「気づき」とはちがったニュアンスがあるように思った。

「砂の中に生きる」においては、自らが設定した共感の枠組み（「宿題に追われ、勉強に追われ、塾に追われ、部活に追われ、走り続ける私の生活は、ある意味この男の生活と同じだ」を、実際に記された文章の感触が微妙に裏切っているように見えて興味深かった。結論に向かって進められる部分よりもむしろ本人の記憶と作品の要約が混ざりそうなタッチに味わいがある。それは心の深部が作品に感応した証ではないだろうか。

「葉桜の頃、そして始まり」は、友人の死、トランポリン、葉桜の季節といった異なる要素を一冊の読書体験によって論理というよりも感覚的に繋いでいる。「友人は、その桜の木が葉桜になる頃迄しか、あの憧れの高校生活を過ごすことは出来なかったが、彼女もあの燦めく陽の光を眩しいと感じただろうか。吹き抜ける風の葉のざわめきを聴いただろうか。今もトランポリンで宙返りをする瞬間、ほんのりと漂う桜の葉の香りを嗅いだような気分になる時がある。今確かに、私は幸せの最中にいるのかもしれない」というまとめの一文からもうかがえるように、個人の体験を表現の普遍性に繋げようとする意識が感じられる。それは現実の死に向き合うスタンスとしては危ういとも

本と出会う

角田 光代

今回は、まず本と出会い、そこから何か体験するのではなく、自分の体験に合わせた本をあとから選んでいる、という印象の作品が多かった。それほど強烈な体験をしている人が多かったのも、たしかだ。だから、テレビであるジャーナリストを知ったことがきっかけで、彼女の本を読み、読んだからこそ考える、「社会の一員として」が、私には新鮮だった。ここには本との偶然の出会いがある。そして、その出会いが導いた思考が、大義ではなく、私たちの生活に寄り添っているところに誠実さが感じられた。

「カラフルな世界の中で。」の作者は、本のなかに、自分とても近い存在を見つけている。現実の友だちのように、登場人物とのびやかに対話している。こうして作った友だちは、一生そばにいてくれる。そのことの幸福を思い出した。「この生命ある限り」の書き手は姉を亡くすという壮絶な体験をしている。一度講演を聞いたことのある作者の著作を読むことで、その作者とより深い対話をするに至った。「葉桜の頃、そして始まり」の作者もまた、友人を事故で失っている。死について考えなが

ら、死について書かれた本を読むことで、なんとか、そのことの意味を理解しようとしている。何気なく挿入されたトランポリンの場面が印象的だった。

「母との再会―乙母さんへのメッセージ―」の作者は、母親を病気で亡くしている。そのどうしようもない喪失感と折り合いをつけるために、この本を選んで読んだのではないかと想像する。この作品には作者のかなしみがストレートに描かれていて、私も泣いてしまった。喪失感とはぶんずつと埋まることはない。けれど本はこうしてかなしみに寄り添い、ときに支えてくれるのだと、この作品に教えられた気がする。

「砂の中に生きる」が、私にはじつに新鮮だった。私も高校生のころに『砂の女』を読み、この作者とまったく異なることを思ったからだ。私はともかく、砂がおそろしい、こんなところにいきたいと恐怖し、今小説の内容を思い出しても、砂を噛んでいるような錯覚を抱くほどで、だから、この小説から現実の生活における教訓を導き出していることに、驚いたのである。そうか、そういう読み方もあるのかと、感心した。

「灰と化す思考」は、視点がユニークだ。しっかりと自分の言葉を使って、巧みな構成で描かれている。活字離れという、世間で言われていることをそのままにとらえず、自分のものにして思考し、掘り下げている。本を読むということは、何かの利益を得ることではない。教養のためでも、勉強のためでもない、

もつとゆたかなものがそこにあるはずだと、この作品はあらためて気づかせてくれる。

偶然に出合った本によって、今まで考えなかったことを考える、気づく。それは本当に幸福なことである。それだけではなく、あまりにも強烈な体験をしてしまい、それを分かち合ってくれる本に出合えることも、やはりひとつの幸福な体験なのだと、選考を終えてから思った。

読書は人間と社会の質に関わる

文部科学省初等中等教育局主任視学官

田中 孝一

高校時代の読書体験は、その時だけでなく、後々の自己形成にも大きく影響を与えるものです。私の場合、高校卒業後数十年経た現在でもますますそのことを実感しています。

文部科学大臣奨励賞の那須映里さん（筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部二年）の「灰と化す思考」は、レイ・ブラッドベリ著（宇野利泰訳）『華氏451度』を体験書籍として、体験書籍と現在との共通点を人々が本を必要としなくなったことだと認識を述べた上で、読書することと人間が思考することとの結びつき、ひいては社会の在り方との関係などについて考察を進めています。那須さんが考えたのは、読書を通して個人だけではなく、社会もその質が保てるということではないでしょうか。情報を鵜呑みにしないで物事を深く考えることの大事さを標榜しつつ、これから成長し生きていく社会への、那須さん自身のまなざしが、読書という積極的な営為を伴って鋭くなっていく様子がうかがわれます。

さて、私たちは、書物と様々な接し方をします。体験記中で

取り上げられていたエピソード、すなわち、本の切りつめやカット、テレビ番組での古典的名作の短時間での解説も、書物との接し方の一つと言えます。原文そのものとの直接的な接触を大事にしつつも、いろいろな本との出会い方を工夫し楽しむのも、読書の多様な楽しみ方の一つとして受け入れていくこともまた楽しいことです。

全国高等学校長協会賞の朝田琴音さん（兵庫県立日高高等学校三年）の「母との再会―乙母さんへのメッセ―」は、伊吹有喜著『四十九日のレシピ』を体験書籍として、三年前に亡くなったお母様の家族への愛に改めて気がつき、「今生きている私は、母が愛してくれた私だ。」という認識に至ります。ここでは、その母を自分のテイクオフ・ボードにして前へ飛び立つ気持ちがあふれていることでしょう。書名にある「レシピ」とお母様の日記帳にある料理のレシピとのイメージの重なりが読書体験記として厚みを加えています。

同じく、全国高等学校長協会賞の合田葉さん（香川県立高松高等学校二年）の「砂の中に生きる」は、安部公房著『砂の女』を体験書籍として、作品世界の状況が高校生として過ごしている毎日の在り方と「重なって見える」ことを出発点にして、自分の今を見つめて前進しようとする姿勢が印象的です。読書には、確かに、今の自分を見つめ直し、新たな歩みを促す働きがあります。この体験記はその好例と言えます。

このほか、一ツ橋文芸教育振興会賞の五つの作品も、一つ一つが高校時代のかげがえのない読書体験記です。それぞれが、自らの今までの成長段階での経験、葛藤、肉親への思い、これからの国際社会での生き方などを課題として真正面から受け止めつつ、体験書籍と向かい合ったものです。

最後に、全国の高校生が、本読書体験記コンクールにひとつた高校生とともに、それぞれのスタイルで、読書の歩みを更に進めていくてくださるよう心から期待します。

思考と想像

全国高等学校長協会

村越 和弘

「灰と化す思考」（那須映理）は、『華氏451度』の読書体験記で、かつて映画化もされた作品だ。那須さんは「私たちは『人間が思考しなくなること』の恐ろしさを想像し、今、世界がぎりぎりの状態であることをしっかりと受け止めなくてはならないと思う。」と警鐘を鳴らしている。インターネット上には無限の世界が広がり、情報量は計りしれない。ツイッター花盛りで、表現者も飛躍的に増えた。しかし、「思考」のない表現、「想像」を駆り立てない表現は何も生み出すことはないだろう。「活字離れ」を「物事に対して深く考えずに情報を鵜呑みにする人々が増えた証拠ではないか」という指摘には同感する。読書は思考を深め、想像力を豊かにする。まさに「読書体験記コンクール」の意義を言い当てた体験記である。

「母との再会―乙母さんへのメッセージ―」（朝田琴音）は、熱田家の人たちが「乙母さんの人生や残してくれた思いに向き合った」ように、朝田さんの三年前に亡くなったお母さんにきちんと向き合おうとする思いが伝わってくる。「亡くなった人

の思いを知る。その思いと共に生きる。」という言葉が心に残る。実は朝田さんや家族にとっては、お母さんは生きているのである。そう思わざるを得ない。日記帳に思いを綴ったお母さんの優しさが伝わってくる体験記だ。

「砂の中に生きる」（合田葉）は、家が埋もれないように砂を掻く男と女の非日常の特異な生活を通して、「いろんな事から逃げていた」高校二年生の現実を見直そうとしている。蟻地獄の中でもがく二人の生活は、実は現実の生活と異ならないと認識したうえで、定着から逃れるのではなく、「すべてひきうけ、あえて立ち向かって行ける自分でありたい」と思う。色々なものに追われ、走り続ける高校生の切実な苦しみを何とか乗り越えようとする意思に共感する。

「この生命ある限り」（岡崎光里）は、作者と著書との二つの出会いがあつたからこそ、姉を失った悲しみを乗り越え、「私にも生かされている意味、使命があるはずだ」と思えるに至ったのだろう。文と人を同時に体験した希有な体験記だ。「葉桜の頃、そして始まり」（諸井佐和）では、「死の側から照らせば生は輝く」ことに気づいたとある。読者の心の有り様が読書体験をより豊かにする。「カラフルな世界の中で。」（根笹みのり）では、私は「なぜ生きなくてはいけないのか。」という疑問に答えを見つける。「カラフルな世界」に生きようとする筆者にエールを送りたい。

「押しつぶされてしまう前に」（町田紗由梨）は、二度読んだ時のそれぞれの感想が述べられている。心の成長は読み方を変え、読書の本質が体験記として表されている。「社会の一員として」（吉川涼）は、「国際社会で生きるとは何か？」と自問自答する。センセーショナルな事件を真摯に受け止め、我が事として考えようとする姿勢を評価したい。

＊第三十二回全国高校生読書体験記コンクール全入賞者一覧＊

【文部科学大臣奨励賞】

一編

千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	二年	那須映里	灰と化す思考
-----	----	-------------------	----	------	--------

【全国高等学校長協会賞】

二編

兵庫県	県立	日高高等学校	三年	朝田琴音	母との再会―乙母さんへのメッセージ―
香川県	県立	高松高等学校	二年	合田 栞	砂の中に生きる

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

五編

福島県	県立	若松商業高等学校	三年	岡崎光里	この生命ある限り
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	一年	諸井佐和	葉桜の頃、そして始まり
岐阜県	県立	大垣北高等学校	二年	根笹みのり	カラフルな世界の中で。
広島県	市立	広島市立美鈴が丘高等学校	二年	町田紗由梨	押しつぶされてしまう前に
高知県	私立	土佐高等学校	一年	吉川 涼	社会の一員として

【優良賞】

三九編

北海道	道立	旭川東高等学校	二年	高成壯磨	Do it! Do it! Go Ahead!! ～突き進め!!～
青森県	県立	七戸高等学校	三年	下山夏葵	銀河鉄道の友情論
岩手県	県立	盛岡北高等学校	二年	工藤 柊	見える現在と見えない未来
宮城県	県立	仙台二華高等学校	三年	蒲生侑佳	意志の魔法
秋田県	県立	十和田高等学校	一年	藤田萌寧	私を変えた物語
山形県	県立	天童高等学校	三年	大山瑞穂	友達
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	名和日向子	「日向子」として生きる
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	三年	星 めぐみ	大人になるために
群馬県	県立	前橋女子高等学校	一年	片淵桃子	視点を変えれば、世界が変わる
埼玉県	私立	星野高等学校	一年	笠原 梓	十五年後の私へ
東京都	私立	早稲田大学高等学院	三年	池田有輝	石橋を叩かない

神奈川県	市立	横浜市立ろう特別支援学校高等部	三年	伊藤峻太	祖父と戦争
山梨県	私立	山梨英和高等学校	二年	土橋有希子	「変」が問いかけるもの
長野県	県立	大町高等学校	二年	高野雅子	強さとは
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	本間慧子	野望を抱く
富山県	県立	高岡高等学校	二年	吉野明日香	築く言葉
福井県	県立	金津高等学校	三年	安達友美	そんな逃避はもう許さない
静岡県	県立	浜松湖南高等学校	一年	山村 栞	生きた証
愛知県	県立	一宮高等学校	一年	小島響子	勇気を超えるもの
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	一年	今井 淳	他人が見た毒虫
滋賀県	県立	高島高等学校	三年	伊庭朱音	私がしたいことは
京都府	私立	京都女子高等学校	一年	小川夏十星	こちら側とあちら側
大阪府	府立	天王寺高等学校	一年	大島知恵	変わらないもの
奈良県	県立	橿原高等学校	一年	高島逸花	手紙
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	音無悠花	理想と現実
鳥取県	私立	鳥取敬愛高等学校	二年	中村明日香	失敗すること
島根県	県立	浜田高等学校	二年	木島卓哉	ひかり
岡山県	県立	岡山一宮高等学校	二年	行成奈穂	挑戦することで見えたもの
山口県	私立	サビエル高等学校	一年	宮本まりあ	いのちより大切なもの
徳島県	県立	徳島北高等学校	一年	藤井未来	声、風景そして言葉
愛媛県	県立	松山東高等学校	二年	片岡 宗	絶望と希望―沈黙を読んで―
福岡県	県立	門司大翔館高等学校	二年	村岡佳名子	ターニングポイント
佐賀県	県立	致遠館高等学校	一年	吉田 滯	私だけの風景を目指して
長崎県	県立	壱岐高等学校	二年	野本ひかり	「人間失格」と私
熊本県	私立	九州学院高等学校	一年	古閑加奈絵	思いに寄り添って
大分県	県立	大分上野丘高等学校	三年	藤崎佳菜子	「幸せ」に変えていく力
宮崎県	県立	延岡高等学校	一年	佐藤勇太	家族との絆
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	三年	木原眞由子	はしよられた過程
沖縄県	県立	開邦高等学校	三年	大城さゆり	差別・偏見のない社会を築こう

【入 選】

一八八編

北海道	道立	旭川北高等学校	二年	富田裕也	十人十色
北海道	市立	札幌旭丘高等学校	一年	小林 鈴	ことばが劈かれるとき人は変われる
北海道	道立	室蘭清水丘高等学校	三年	橋本彩織	疾走という人生の影響
北海道	私立	藤女子高等学校	二年	柿崎真里奈	自殺者の遺言
青森県	県立	七戸高等学校	二年	佐藤 雛	自分を知るということ
青森県	県立	弘前高等学校	二年	東谷 輝	あの一球を目指して
青森県	県立	弘前中央高等学校	三年	佐藤巧大	人生を編む
青森県	私立	松風塾高等学校	三年	平坂保美	私とあっこ―震災に直面して―
岩手県	県立	花巻南高等学校	二年	横田未侑	逃げる事、向き合う事
岩手県	県立	盛岡第二高等学校	二年	内村ひな子	その「時」
岩手県	県立	盛岡工業高等学校	三年	浅沼野乃花	繋がる
岩手県	県立	一関第二高等学校	一年	佐藤来夏	「桐島 部活やめるってよ」を読んで
宮城県	県立	佐沼高等学校	二年	佐藤里奈	わたしのこころ
宮城県	県立	白石高等学校	三年	大久菜美	部活動に懸ける思い
宮城県	県立	宮城野高等学校	一年	山田黛輝	私が学んだ生き方
宮城県	県立	仙台南高等学校	二年	阿部美沙季	応援
秋田県	私立	秋田和洋女子高等学校	三年	伊藤円香	現代を幸せに生きる
秋田県	私立	秋田和洋女子高等学校	三年	高橋美香子	夢は叶えるもの
秋田県	県立	大館鳳鳴高等学校	二年	大沢明日香	『地動説』と『天動説』
秋田県	県立	大館鳳鳴高等学校	二年	佐藤加奈	忘れない、明日へとともに
山形県	県立	山形西高等学校	二年	柴田南子	前向きな自分になる
山形県	県立	新庄南高等学校	一年	今野綾香	生きる糧と夢
山形県	県立	新庄北高等学校	一年	荒木 駿	「生きる」って、なんですか？
山形県	県立	長井高等学校	二年	古山愛理	夢は叶う
福島県	県立	会津高等学校	二年	池沢ひかり	未来を見詰めて
福島県	県立	会津高等学校	二年	西澤萌菜	言葉の魔法使いになるために
福島県	県立	安積黎明高等学校	二年	中村佑佳	銀の匙さがし

福島県	県立	橘高等学校	一年	佐藤麻菜	『障害役者』を読んで
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	片見文香	「幸せ」のカルテ
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	久下敦子	自分らしく生きるための選択
茨城県	県立	下妻特別支援学校	三年	伊藤菜海子	色々な普通
茨城県	私立	水戸啓明高等学校	二年	長谷川梨羅	裏切りと信頼
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	二年	佐藤有美	「苦しみ」を見つめて
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	二年	稲部量子	人との出会い
栃木県	私立	宇都宮短期大学附属高等学校	一年	村上詠里子	シンブルだからこそ
栃木県	県立	栃木女子高等学校	一年	毛塚咲矢	私にできること
群馬県	県立	前橋女子高等学校	二年	吉川綾乃	努力し続けるという努力
群馬県	私立	共愛学園高等学校	二年	井田千佳	在日ってなんなのかな
群馬県	県立	渋川女子高等学校	二年	堀込 響	『くちびるに歌を』を読んで
群馬県	県立	高崎女子高等学校	一年	宮崎真由香	春を乗り越えて
埼玉県	私立	星野高等学校	三年	真貝依代	戦争と「てだのふあ」
埼玉県	県立	坂戸西高等学校	二年	岡野紗也香	その一瞬を求めて
埼玉県	県立	坂戸西高等学校	二年	篠原奈月	「人間失格」を読んで
埼玉県	県立	坂戸西高等学校	一年	齋藤依見	明日もまた生きていこうを読んで
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	宍戸 彩	助けて、助けられる人生
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	二年	峯 明香里	お互いの見えない壁
千葉県	県立	安房高等学校	一年	柳原佑香	凜として――雲外蒼天を生きる――
千葉県	私立	和洋国府台女子高等学校	一年	神山かおり	「T's blood」を読んで
東京都	私立	大妻高等学校	二年	下脇ぼふら	情報を見る目
東京都	私立	大妻高等学校	二年	吉村未希	初めの一步
東京都	私立	女子美術大学付属高等学校	三年	高瀬有美子	私の中の獣
東京都	私立	東京農業大学第一高等学校	三年	岡崎英美	認知症と長寿社会／笑顔のままで／
神奈川県	市立	横浜市立ろう特別支援学校高等部	三年	上岡彩乃	選択
神奈川県	私立	横浜共立学園高等学校	一年	野村春歌	国境をみる
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	小柳澄乃	和室が持つ力
神奈川県	市立	川崎市立川崎総合科学高等学校	二年	坂口珠仁	王子さまのものさし

山梨県	県立	甲府南高等学校	二年	佐野このみ	その「音」は時を越えて
山梨県	県立	甲府南高等学校	一年	永松果林	空に飛び込む勇氣
山梨県	県立	都留高等学校	二年	佐藤礼奈	言葉の海を航る
山梨県	県立	都留高等学校	一年	小保智聖	大切な人へ
長野県	県立	大町高等学校	二年	中村さよ	自分の人生
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	野村真緒	幸せさがしの旅
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	山田聖巳	視点を变える
長野県	私立	松本第一高等学校	一年	高橋野萌	短気脱出
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	伊藤万里菜	生きる光
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	中俣美波	未来と現在のつながり
新潟県	県立	高田北城高等学校	一年	長崎世那	支え、支えられて
新潟県	私立	新潟清心女子高等学校	二年	樋口早恵	私と山椒魚
富山県	県立	高岡南高等学校	二年	絹野志朋	夢を追う十七歳
富山県	県立	高岡南高等学校	一年	濱浦寛子	人は変われる
富山県	県立	富山商業高等学校	一年	打林綾音	今を一生懸命に生きる
富山県	県立	南砺福光高等学校	一年	鈴木華	自分のために
石川県	県立	金沢錦丘高等学校	一年	横山光	一瞬の快感を求めて
石川県	県立	金沢桜丘高等学校	一年	山崎爽夏	おじいちゃんがくれた夢
石川県	県立	金沢辰巳丘高等学校	三年	狐島葉月	忘れえぬ花輪
石川県	県立	野々市明倫高等学校	一年	松尾南実	生きている音
福井県	県立	高志高等学校	三年	三田百恵	時間の中で――「再会」を読んで――
福井県	県立	藤島高等学校	二年	加藤桃夏	みんなの「生きる」私の「生きる」
福井県	県立	武生東高等学校	二年	揚原由衣	雨宿り
福井県	県立	美方高等学校	三年	渡邊恵奈	ガネーシャの教えより
岐阜県	県立	大垣商業高等学校	二年	北村麻好	言葉の力
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	一年	中西杏樹	美しくあるために抵抗を。
岐阜県	県立	大垣南高等学校	二年	浅野早織	笑顔の奥の苦悩
岐阜県	県立	加茂高等学校	二年	田原旭	Progress
静岡県	私立	静岡英和女学院高等学校	二年	ショウラー舞	道化

静岡県	県立	静岡商業高等学校	二年	石本夢歩美	道具の先に見えたもの
静岡県	私立	静岡雙葉高等学校	三年	勝山理央	生きる意味を問う
静岡県	県立	掛川西高等学校	一年	大谷真優	全部噛みしめます
愛知県	県立	豊田西高等学校	一年	三浦千明	自分らしく生きる
愛知県	県立	一宮西高等学校	二年	服部隆征	坊っちゃんの正義
愛知県	私立	愛知淑徳高等学校	二年	安藤里沙子	夢の動機
愛知県	県立	刈谷高等学校	一年	神谷奈於	「太陽の子」を読んで
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	伊藤哲也	「血」という重力
三重県	私立	暁高等学校	一年	森 理沙	特別
三重県	県立	桑名高等学校	一年	桐嶺真琴	マーヤの夢と私の挑戦
三重県	県立	名張西高等学校	一年	森田なな瀬	理解できない生きもの
滋賀県	県立	水口東高等学校	一年	田ノ岡優紀	二人の私とこれからの勉強
滋賀県	県立	草津東高等学校	二年	清家美央	がむしゃら
滋賀県	県立	東大津高等学校	二年	田中佐季	覚悟
滋賀県	県立	安曇川高等学校	二年	石井沙弥	利益は存在しない
京都府	私立	京都女子高等学校	二年	松室朝香	キセキのいのち
京都府	私立	立命館高等学校	三年	大西草太	言葉は「交換」するもの
京都府	府立	桂高等学校	二年	宮脇 潤	固定種つまり固有種を守ることの重要性
京都府	府立	西乙訓高等学校	二年	大石紗恵子	長谷部さんから学んだこと
大阪府	府立	天王寺高等学校	二年	大野恵梨佳	変化
大阪府	市立	大阪市立南高等学校	三年	豊田ちなつ	挑戦するための挑戦心
大阪府	市立	大阪市立南高等学校	三年	山本咲里	私の知らない世界
大阪府	市立	大阪市立南高等学校	一年	前畠早希	ここにあったもの。これからの私
兵庫県	私立	小林聖心女子学院高等学校	二年	中川真綾	偏見の先にあるもの
兵庫県	県立	神戸高等学校	一年	佐々木瑠嘉	すべては仮説にはじまり、仮説におわる
兵庫県	県立	姫路西高等学校	二年	安宮かなめ	私の「かあちゃん」
兵庫県	私立	関西学院高等部	一年	前山幸一	『阪急電車』とともに走った路―四度の出会いをとおして―
奈良県	県立	橿原高等学校	三年	森岡 恵	「やさしさ社会」の中で
奈良県	県立	橿原高等学校	一年	伊藤美羽	心に棲むうさぎ

奈良県	県立	畝傍高等学校	一年	田中緑里	成長に必要なこと
奈良県	県立	青翔高等学校	二年	岡田莉奈	ヒカリ
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	宇野辺堯子	呼吸する日本へ
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	辻内晴子	仕事にかける思い
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	栗山愛梨	奇跡の連続
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	神前梨理子	リーダーとしての日本について
鳥取県	県立	鳥取西高等学校	二年	西尾宗一郎	To Be Free
鳥取県	県立	鳥取西高等学校	二年	横山絵美莉	先人が示す道標
鳥取県	私立	湯梨浜高等学校	二年	西尾香里	今、できる「ありがとう」を
鳥取県	県立	米子南高等学校	三年	葉山美歌子	元氣百倍をありがとう
鳥根県	県立	出雲高等学校	二年	鎌田佑希	身体論についての考察
鳥根県	県立	出雲高等学校	二年	立花和嘉子	押してもダメなら引いてみる
鳥根県	県立	益田高等学校	三年	齋藤 萌	自由の意味
鳥根県	県立	松江北高等学校	一年	添野沙羅	黒い海の手へ
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	二年	酒井祐佳	言葉という言語
岡山県	県立	笠岡高等学校	二年	門田実夕	思い出という「花園」
岡山県	県立	玉野光南高等学校	一年	中西雅暉	北原さんから学んだこと
岡山県	県立	岡山朝日高等学校	二年	能登 愛	もう一度輝くために
広島県	市立	広島市立美鈴が丘高等学校	二年	植田琴乃	限界を超える時
広島県	県立	安古市高等学校	二年	黒木裕香	主人公の背中を見てみる
広島県	県立	呉三津田高等学校	二年	河崎一佳	友達
広島県	市立	広島市立沼田高等学校	二年	児玉星梨花	初めて命の尊さと向きあった十七の夏
山口県	私立	サビエル高等学校	一年	竹本萌華	「水俣病」終わらんよ
山口県	県立	周防大島高等学校	三年	藤本彩若子	アーチェリーに射抜かれた私
山口県	県立	防府商工高等学校	一年	湯面 愛	車いすで僕は空を飛ぶ
山口県	県立	熊毛南高等学校	一年	森政真帆	あっこ「生きる力」をありがとう
徳島県	県立	徳島北高等学校	二年	上田萌々香	平和な世界を目指して
徳島県	県立	富岡西高等学校	二年	清原由依	私の目標設定——自分らしく生きる
徳島県	県立	城東高等学校	一年	森 友里乃	わたしの友だち

徳島県	私立	徳島文理高等学校	一年	住友志帆	家族がいるところ
香川県	県立	高松高等学校	二年	都丸瑞紀	生き方を選ぶ
香川県	県立	高松高等学校	二年	新居田苑子	自分を貫く
香川県	県立	高松南高等学校	二年	古川智貴	農業の可能性を見つけた夏
香川県	県立	香川中央高等学校	二年	大野順貴	これからの自分
愛媛県	県立	松山東高等学校	三年	高本真澄	祈り
愛媛県	県立	大洲高等学校	一年	高本明日香	明日の為にできること
愛媛県	県立	新居浜西高等学校	一年	河村柚希	よくわからないもの
愛媛県	私立	済美高等学校	一年	松下 楓	「コマコ」と「私」
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	金田愛美	良寛にひかれて
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	川田 愛	幸せな生き方を探して
高知県	私立	土佐女子高等学校	二年	町田悠惟	博士と出会えた奇跡
高知県	私立	土佐女子高等学校	二年	宮田愛子	私がつくるパズル
福岡県	県立	門司大翔館高等学校	二年	尾崎仁美	今を生きる
福岡県	県立	香住丘高等学校	一年	花田悠真	心とは
福岡県	県立	修猷館高等学校	一年	八百史織	明察はできないけれど
福岡県	県立	明善高等学校	一年	原 遼太郎	原子力を考えた夏
佐賀県	私立	弘学館高等学校	二年	松隈侑加	欲
佐賀県	私立	弘学館高等学校	一年	五箇野美香	大切な存在
佐賀県	県立	有田工業高等学校	三年	岡本百華	夢の原点
佐賀県	私立	佐賀学園高等学校	二年	古川真帆	心の声と向き合う
長崎県	県立	長崎南高等学校	二年	田中美里	自分を変えらるということ
長崎県	県立	西陵高等学校	二年	松尾知春	生きてゆくために
長崎県	県立	佐世保北高等学校	一年	中釜美里	コペリ君に学んだこと
長崎県	私立	純心女子高等学校	二年	西田朋美	望み
熊本県	県立	阿蘇中央高等学校	二年	杉本祐海	今の自分をみつめなおして
熊本県	県立	阿蘇中央高等学校	二年	土井雅子	限界のその先へ
熊本県	国立	熊本高等専門学校	二年	上妻なお	ガールズ・ブルー
熊本県	県立	熊本高等学校	二年	田之上智宏	舟と宇宙と音楽と

大分県	県立	大分上野丘高等学校	二年	佐藤夢木	学びと人生の関わり
大分県	県立	大分雄城台高等学校	二年	伊藤結衣	私の生きる道
大分県	県立	日田高等学校	一年	伊東花乃	千年前の太陽が
大分県	私立	昭和学习園高等学校	二年	相良美鈴	友達失格
宮崎県	県立	日南高等学校	一年	松浦有香	「いのちの食べかた」という本を読んで
宮崎県	県立	都城西高等学校	一年	鎌田佑美加	努力は人を裏切らない
宮崎県	私立	宮崎学園高等学校	二年	山鹿友樺	脳死と遺族の思い
宮崎県	私立	聖心ウルスラ学園高等学校	三年	飯干裕美	ある夏の思い出
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	一年	後藤滝弥	生命の飛翔
鹿児島県	私立	池田高等学校	一年	兼廣咲南	改善のきっかけは一冊の本
鹿児島県	私立	池田高等学校	一年	藤井ハルネ	一粒の麦を目指して
鹿児島県	県立	加治木高等学校	二年	上園泰弘	「生きる」ということ
沖縄県	県立	開邦高等学校	二年	鈴木まこと	私は夢を探するために生まれてきた
沖縄県	県立	普天間高等学校	三年	田中瑞穂	必ず、やります
沖縄県	県立	南風原高等学校	三年	川満俊祐	まことの花になるために
沖縄県	県立	那覇国際高等学校	三年	橋本そよか	最強の家族

(敬称略)

上位中央入賞者八名の読書体験記、及び優良賞・入選作のお名前、
高等学校名は、左記の『一ツ橋文芸教育振興会の読書推進活動』ホー
ムページに紹介されます(2月上旬予定)。
<http://www.hitotsubashi-bks.jp/dokusho/>

表紙撮影・五十嵐和博
表紙デザイン・中島慶章